

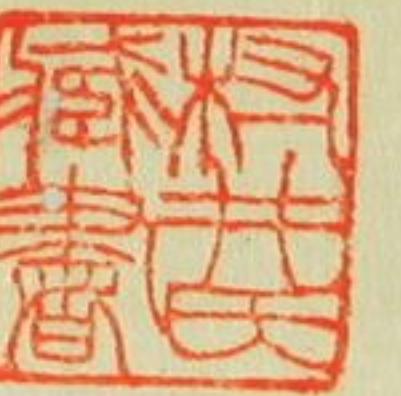
5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

古今和歌集正義 秋下 八





古今和歌集正義卷第五

秋歌下

是貞のみの家乃寺合のう

文庫やにいあ

吹きに秋の字本がまするまほう山風をあくとみん
委へく是乃よもやせや

さす木を色ふきてくらむれ波のくわうねかう等

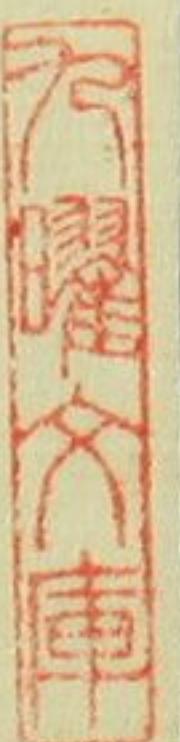
林の寺合へきるとけり後ろ

記すくも

をみうせぬとまくとれ山ひあくせの音や秋を用ひてまん

題まくと

よみ人不知



霧をもて鷹をなくわら行軍のあもれ思ひもみじぬる
神無月ももひまくまくにうれてうづうづ神多の杜
世記氏の自業本とよ秋部の下巻あやうれ此うこう
日の平田もいさくせとねよやまくはりもける神なりの社とあや
是うふくまきとくとり秋の奇神無月とよ(き禍主)な
打開をせ自業本よりて云く平田もいさくせと
杜もあはるとよくら也下句のまくはりまえ新しに帖
ろすとまつまくはりと余やまく猿
本のまくよてまくはりと云ひ從ひとされと下句のまく
まくはりとまくはりと云ひ從ひとされと下句のまく

しむ也と見て然らうもあらずや其奉身より出でるゝともいふ
ちやんびと其様の事はござりぬもからずちるゝとあります
即上句を正き由をすゞ此句より云ひて下句をすまへも
さうとも互に、これぬまく因え形をかね又と帖
まがの句を自筆奉用して末の句いうてうけようと言
と今奉はまし也さう云ふ今ようとつ(主と卑田もつて)
よねの移ふ神なるの社とハげくわ所をぬ事なき
うれてハ其本れをうち方より出づる語下とも上より承
あたる所をうするもあれてハつゝゆゑ云ふきはれ
うれく様よちのまをもちらりんすはよの句もやう

まくまく時雨もゝまく時雨もとあるすけの杜のう
はうふかようか時あつともちかきとなくまじれいき
早紀志代諸君さんとおやき事には何のようまつて
今云うてむづみけるは只早くもみぢやまとつめられ
はよまあつねさうも妨だり早田といまくじよみうねて
福よといえらまとて早田をめと林のいたるふと孤なまく相
あたづねハシ給くと云々謂ひ承れハナモサム

角

○余材ニ神無月ハ時雨ト云ん料也神無月ウミ音得
角ニ當時の事ニハアレシトアリ遠鏡も是ニモニ

共ニ非也神無月もくれもひよこわらぢくは次ノ神
無月のあををあく祭ますとあくに用ひます
十月ノ在くニ言也時雨ト云ん料君んや又ノ字を入
ミテキ諸君がんや又はをあくまきくいづきを
やまくまほもあま事也打開ノ秋の新ト云々神無月ノ
くれもひよこと云々ハアリ是を演て神無月のう一言
を入くたまくとて、説をすと彼五月まに花橋ノとづら
ふくとくとくとくわて、ひゆうすとて貫之葉と云方を
よどとすとくふた從ふ(一)うのとけあは大やうお葉
うう出に秋の物とくとく葉桑もハ九ハ長月ウツカミ

み此集小も難部ハ木のサあとシアラリヨレバ長守ア
秋ハモアレシ神ミトトとシテ春ハ霞ミ夏ハ蝉ミ冬ハ霜ミ
ヨリト舉ハれシマシアシミカモシルシ神ミ與シ月ミトトより
るシモシアシナカタシトシ大シ秋ハ主シトシカシ也シ其役シ神ミ無シ月ミ
あシシシアシナカ定シリシよ時ハ無シ冬ハのシトシ也シするシ云シ
ふシアシ紀シ一シまシは撰シ出シトシ大シ世シ中シ時シ無シ冬ハのシ物シ
とシおシひシアシ今シ子シをシ祭シ神ミ無シ月ミのシ時シ無シ冬ハのシ物シ
税シなシシシ古シ晴シきシ也シ

千早振シ神ミちシ山シのシモシウ華シだシシシうシるシよシねシ
貞欽シ御シ時シ後シ締シ殿シのシまシ日シ梅シのシ本シあシアシ主シにシのシてシ

藤原 う純シおシ

さシりシきシらシ枝シのシモシうシりシけシかシきシうシくシすシ
さシみシいシもシのシトシみシるシひシてシよシすシ

竹シすシをシよシそシ木シ茶シうシたシろシいシくシ木シのシアシわシれ
いシ山シよシうシてシきシるシれシたシ山シのシおシ葉シうシてシよシれ

ほらかシ

秋ハのシきシアシリシ音シ羽シ山シ冬ハのシモシうシ木シのシアシわシれ
のシうシアシリシ音シ羽シ山シ冬ハのシモシうシ木シのシアシわシれ
峯シ梢シのシモシうシ初シきシりシとシいシやシかシとシよシりシおシもシ
いシるシ山シのシモシうシ風シのシ鳥シだシもシ方シこシアシ後シ撰シもシ松シ出シう

くほ聲をそよぐ林風ハ音羽山より吹うちるをかくあり音を
弛すやうの音をつゝく者をして云うけそまこと見ゆるをなべて
山と愛れど外の筋りはまうがまうせひとも我をば君がま
とれなむに致すれば音を絶を君前波の浦よりはとど
誰うえうきく木綿をハ付くちうれ音をそよみぞ紀本
綿仕鳥うと云ふ歌いふとハ綿とからくさまで省きて
しろり古のまやいかをね世解あやまつむれ争一感祝
この音羽山ハ音ハやすらぎてと云ふまくうきもんならん
まづる行過ぬてとれと初音はきて自然そよぐるの
匂ひうき

○遠鏡ニ秋ノタチシメタ日カラニテ風ノ音モカバツテキタカ今日
見レハ此山ノ木共モワロク色カツイテキタツイヒトニシテは跡此
は秋風のやうに似り其秋風の音ハとはゞ一其秋風のねと
つまくとは安西ハナスミシトモモ意秋のつゝくと
ぬ事也さく秋風うふきよリ思ふ風の音もううかくと
いへき上の秋風ヒトの音も変てさも経脈きづきて風のわり
なづう物のうきよすやるせきふくよ今秋風うふきよ
秋ノ立ソメタヒヒツく風あくとつ事を取扱ひるを
言ひやうをだる強音也又柄もとくよみて風の音も變ア
くる音をあくせるやのせと云ふも承也此も文字ハ次

山の木葉の色たまゆとあらわすて常
よもうらへひなすてにまよふたよせれども
あつて云せ何う奉の向の意をとせしむる
ちえ梢の毛もりてあるがなふへあへこゝいはてさも
とくを付しきどあるをやうり秋を音羽山のみよせ
そくすゑづき諸勢を失ふるか也

亦復何足為之也哉

卷之三

白露の色ハひづきいよそ秋の色也。紅葉くそも紅葉。

士生忠岑

秋の朝露を身に付けて此處や那處をうし
余秋、朝の露を身に付けて此處や那處をうし
ちゆく、身に付けて此處や那處をうし

卷之二

こくふをあやしくすもつじきす也色つらうすの
者あやそひて色をわとすを云松の病はて白ト見
ゆまくあはあてられ赤也これに黄也これに濃し
きは淡りあと本にけひく茎もと人やと云せされ
くぞうれくおはくと云はく言はへと委へく冬の梅れ
行うとくとくわざれ不へ

○遠縁々色々チカウテオクサウナと云ふハ非也こゝく
一を色の異ある言ひとけまとゆるハいりく
あけくと云てこゝり重ねく異うくいわへあく
そくとくや語りとて紫雲と紫云ん事常あれと

向朝すかうむ事也色と異うと云初ハ世よりく
色と云て異のみあれど也俗も色くちうく
にくとんじて色くもくとく云れ
もくとくやくそくとく
そくとくやくそくとく

秋のくとくとくとく
行ひとくとくとく
あもと病もくとくとくとくの山ハつての山行
きの意

○余材と笠取山を取らる意也とひお聞と取てさとを
云なり能くとあ爲わし處といひ遠縁々奪ヲモツト云名

ナヘトモイる共ニ非也。内侍取の意を以て居り奉テ已。
ひきぐれにひ候るもれ也。中ノモ遠鏡のもつともするハ
ハシム泥と俗言也。差をものと云祠ある。キタクレんや
ハシムは差を被く意。ムカシ候。トモ行るもしくいふ。リチ
ルムラムサハモ。一毒くは上の早苗。トモ。アヒトモアリ。
又遠鏡ス。笠坂山代。トモ。連呼。トモ。唱ス
ふ語ハ。それ獨り。このものとあひ。それの繆也。又病也。病
トモ。耳聞。ア病也。洩して。す。ハ。遠鏡。露ホトモ
モリハスマトイ。トモ。あは叶。モ。それトモ。こは病也。
病モ。ア。か。モ。す。モ。き。つ。ア。モ。若。ひ。て。障。也。

莫ニ。至モ其面の病かん。シテトヨ。内侍。アヒトモアリ
候。や。トモ。ア。リ。モ。キ。モ。ア。リ。ト。モ。ハ。モ。レ。ア。リ。モ。象
を。モ。ア。ト。モ。ル。

け。ゆ。き。

ちや。も。神。の。つ。ま。で。も。よ。く。も。祐。ふ。あ。ト。モ。ト。け。う。れ。も。き。り
神。の。つ。け。う。れ。と。な。ハ。常。禱。久。久。ト。き。を。推。す。が。る。せ
の。秋。ま。に。遁。き。滑。を。色。え。れ。ア。ト。云。あ。ト。も。其。わ。ト。立。合。了。紀
意。也。次。ト。秋。風。ア。モ。あ。ぬ。も。ト。ち。急。の。と。あ。モ。今。ト。周
是。貞。代。み。の。家。は。奇。合。ア。ト。め。る。奇。み。縁。

寛平御時。奇合の言。代。奇。合。ア。ト。め。る。

トミ人不知

秋よりく移ろいゆくれまへ移のれも限られ色とえ
黒はまはあさりてらるめかし移とくつてももじに
こらすと云てよし物にて松の悪一見もみぢけ移ろい
行きなりと云ても云う同一意也

○余材今限の毛とは干入を盡らすと云て井間遠鏡
も是を以て共に非也此限アリ毛は今ある色の限アリハ
アリと推する本毛の毛比限アリ也今既にらんへうやまと
人望をつれてアリ、又なまめうまで云きれずも

ゆとりあんや、らちふとをひやくぬ(きこすねど)と云
也實今らき限アリと云す諸勢がくぬを知る事
又は毛一毛を限りを惜しうがくは未だる落葉ノ部此
佐保山の木の落葉らむ(ニ奥山は岩牆をみちおぬ)一毛
ふ奇代次ナリと入ぬ(代也)也

てもえ

紀のくわがア

そりたれ縛かれ秋芳れ佐保の少(を)くらぐくそん
是貞のそぞ家は奇合のうと云々人不知

秋よりふとをかくらう佐保山のくらもみぢけすとん

秋の事とてある

坂上これのや

内も外もいはれをひうきそれと林へあくをなしてみゆうれ
人のさんさい葉もしおりきてうゑをもうる

在原なりのの音便

うゑつ枝ハ秋がさすやさうらん花こうらくめねまくらや
物向真字れ勢結々遷植者とうきねられ家集うむらへとふる
空あらてまもなむや枝一枝ハと云ふ事此外よきく他の
辞と例とくとくへ更う事をうへハ深う事絶アトテ
ハどもやと或ハ取ち事捨る事をとむとれどもとて
なま云ふ物のとくとくすもなむやゑをゑとはあれと立

ゑいとほひまほせうひはとほあれとく一ひとほひとほ云ふさうはう
ゑーうゑはむせうあくぬ初也只紀氏の葉と云古本うゑー
うゑいとあれとくとくわくうり紀氏の自筆かうすほ人の葉かう
くまきれい古き一本と具うれ代のとむた正據とすくと
寛平仲時きれ花をよすを詠ふを

くゆきの朝臣

久くれをみうへてゑう萬やあすけりうとうあやまれる
此等のまく殿とゆまれさますうあきれてけりう
うたるをかし

亨の意ぬくま歩聞にの奇ハナ敷上ゆまれさまとくとく

その例のほへりとまきとひらう然るきもへあたはハ大
やうてのまことれ書きをあくまであるもれて止を得る
のまことせ今、瑞書にて幸そへいたまをやこいあやされ
きうすとあを今へれまえあさんそほのさうらむす
六帖、兼脯卿きふりくをせようは葉の花天は里とや
あとうとみじかのれいと

こまほのみと家の寺谷うる

紫地と白壁

病かうをやて、まじめに兼北花ね、さぬ秋うひく
意ゆき今、よしんよは大やう葉をつきて足ぬふを

當初ハ齡の上に、み病を主として、ようもさうは、彭祖、長寿成
は郡縣の古事記也。其本病、よまと也。

寛平寺時さきの宮林寺のう

大江千里

うふーと紀もかづらうむー葉うけよ秋アあんとやアー
おなう御内々とれきる葉合すとぬをたくうて葉北花
うふーとけくまくまく、アリクル、奇あだわの瀧うる
まうなきるをうるをうる、 そぞぞれ朝ト

秋風の吹く、あらきく、もあらめ、ちくみ、うるをうる、
すれぞろゆき

○余材よりも角を仰りてとては圓済の形を以て曰く云々^ハ
す用ひ御陵の形を臺に仰ぎふせと云ふへ者乎那也斯ニ
内に之よりあらわし形を思へよされそんやうとうすや
さかともも角へとれ形ナリとふ臺の名にて圓とぬ臺かと
いさんを暗くとも角といふれはそく臺を以てアモト
のまゝを飾りおもなうがト御形似ナリキトトヨヤ
さる方々ハ定めり來りせん天德の寺合ナリと數きの圓
済ナヘあひてオヤシケル名也是カドテ数々の盤と云ん
ト向一内を以てとては圓を仰りてとては形を仰りてと
ては

ナリやく次ノ以上のもあれ形」とあり此より仰り出
きふ形にて仙官ト人のつまむる形と用へ新にて思
られるかしむ也

仙官ト手を以てく人のつまむる形とぞ

素性法師

忠までやと山海のまた病のたてつてはらひをあひ難きし
此詩集十三首の内多く殊々これありとつて後成卿も
これ歌ハぬきてゆきとたる五文季の誠とあてきくもあらず
又山海のまた病のたてつて云ふも玉詮くやうよりて末の句
も何となく引ひて歌ひゆくあるから也とへられりぬま

てりと云ふて、神とも夜ともいへど大にある實に
いわゆる幽玄の時にて、やあそくも身も心も死ぬれ也。ありつうき
より岐波山病の事とて、仙家の事とがまく、や此病の
かも只ちのわざとて、されど其病うちれそのそれぞ也。
此末句家集にて、かく御子千世を下せんと今れとては
改々此集撰勤の時例の筆削せられをもとて竟す。其の門下
入へりく衆妙をうゑ、そりとつづきを又六帖にて、年を
経て、すこしあらは此集と家集を探す。くちあらせるも
う也。

○遠鏡ト在所カヘツテ見タレハモハヤ千年モスキシヤウスチ

ヤカと云ふハ罪也。革をかく至るゝをよみるとあるをぬ
て、負もとはと解く叶ハんやは彼玉質の家ハゆくせせ
の孫、値アリと云ふ事ハやうよろんなまハ其仙宮ハ
トキハ千年アツヘンアツヘンカモルキカモルト思ハトリ至ハ
ゆて、かくもものせば、とあるもと思ハトリをさし、
罪を仙宮ハ玉きばらハのうて、けう千年トをとよら
ふ也。萬ハくハ彼玉質も斧の柯ハおもんハせハ難ハん
ハ其山柄ハくハ知ハきハ、とそへてんハるハ、
あるとハは罪ハ一ハ向ハ、行ハの程ハ家ハ千年ト
人ハ其仙宮ハいざハの夢ハくハよハ成ハりふ也と云う

徒々

まじめのかどもて人のもとへまよひをよみる

とものり

花及び人やけときはぬめ代神のみうあやよしむふ
乎の意ぬすき一法法王が使の白衣代故事を下す
口と云はせまつ

大津のせうしとまくらふをよある

ゆくもとらひとれをわらそひのせうしとまくらふをよある
せむれを殺死本を思ひまくらふをよある

よあれ

はゆき

秋の日くちよりへそくとんがよりまことあくゆうりゆを
白葉代とおきよめる

丸阿内羽恒

かあてくをくわおじつまれたふよとせきふまう季の花
初霜のたきまくはくくにき毛ともこれもそーおんとふ
うハハあてくやわんとくはくかわくやわんとくわく
句を下さねかあてくわくやくんとおこくまけかいて
田児の浦ゆえまほを田児の浦ゆき出でんきひとトよアミー
てちよと風一是も異見ニキギ

是更のみの家づき合のて、よみぐれ

きよくちふ秋の日くむは一とぎよあくゆい匂よくねとこくられ

仁和寺より重ね花りをもてすとくまれと仰きと申れ
従ふもてすほからる

平さん

秋をなきてゆくうあわきを重ね花うたふみをなまへ
なづけ千草はうれ秋のまにまかおうみて衰ゆくをなむ
じてうづ降ひく色殊よまさら行を尽きハ秋をハ枯れだりて
又かくうきされと冬く向ひて寒いよく盛んずるを云ふ也方
意上重御旅館の役御室に移りを経ひても世中御うしろみ
もよてやうかくらゑる大御威様のまじゆうをほきとあらせ
くるなまへ

人の家なりきる重ね花をうべくうきを従ふ

禁下

古

はくゆき

題へ

よみ人不知

咲きやかれては花色さうとぞうてうのうと
さう山のうれせみらぬ(ミトヌム)只うとてうつばうす
(ミトヌム)と云ふ似く其様子をえうとぞつようのうと
うの語也俗云ひそむの言葉、やもじやさうかさうといふも
えくねきと明ひをれやもととよくうよくは言也
官はくえくのうまつて山里こゑやと仰きとまく
よみ人

藤原国雄

れく山のいもむき、そむら、あゆしてふ日のをとみれりてゆくそ

此山裏ハ東山今北永觀堂の地也さく岩つまは岩陰也岩陰お
葉岩陰沿岸清清水など連ねる村ハ「下」也「上」也「中」也と
いふもののみ塙の意也「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也と通うせひ
一万字東秋とも鳴陰を「下」也「中」也「上」也と通うせひ
牆の文字を「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也と自然の事也巖
毛岩陰也「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也と「實」
さて朽果んを悔「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也と
さて朽果んを悔「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也と

題あらへ

後人不知

龍田川をみちもれくなる者と曰く「下」也「中」也「上」也
此秋はある人なり「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也
御奇也「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也

とく説明

○す向く左往不此奇ハ或人なり北帝の御祝也「下」也「中」也「上」也
例の「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也「中」也「上」也
のれりん「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也「中」也「上」也
をや此たはを「下」也「中」也「上」也「中」也「上」也「中」也「上」也
の偽作也とぞう説なまくあつたうす

そばく行ひやうる神なりのみじうのやうくゆゑあきよ
又ハあそゝ川をみり秦がる

立田川を毛鳥川と因くあつてて開けたりゆくす
常ハ大やう水をほくとくそんくちんくは石並あきさか

ヨリヤニ也奇のあひどなる三室山へあくまき跡りてお義の
流を來りてとつて一時のあく洞底より行進をつゞく故もか
からお義の權をもれて流を出でて山川のよし皆志ら程
冬部立田川より紀伊國へれやとづかを引合にて背より
こきを時めの為々今一もうちまよお義とあて咲向風をくふん
とく(きなとももく)ちみをはつすアハ子又左往よまく、
あくまく川をもくまく走る所とあくま地方を地理を叶ひて立田川
の水を立室山へあくまく余材立委(き)くをもくはあ義せ
ばも今ともあくまく事異見の嵐あく三室山のむらく
ハの寺のあい委(き)く論定せよ

憲(けん)くは入て、もあひんもあら葉をひまう、さう山おうの風
この句もみらの落葉をひまう、さうと云ふはつねく
うけ落葉の外(ほか)きやうな落葉(おちやう)をとて落葉(おちやう)をとて
秋風(あきのかぜ)ぬお義(おぎ)ぬあら葉(おちやう)のゆく(さく)あらぬ紅(あか)く
あき(あきぬ)お義(おぎ)ぬありあきぬ落葉(おちやう)をとけてとみ人(ひと)
まづまづいき秋(あき)來(くわ)ゆといひも見て其よお義(おぎ)ハあら
の人(ひと)とえきおまく(おまく)て其よお義(おぎ)ハあら
○お用(もち)今(いま)本(ほん)とふ人(ひと)とあや古(いにしへ)本(ほん)の今(いま)と
おのれきつても字(ひが)とひく古(いにしへ)本(ほん)は(は)れや人(ひと)
とてハ前後(まへうしろ)お合(あわせ)ひなうも調(はん)てくのくさるも

の也

○遠鏡^ト紅葉^ハ庭ニチツテシ^トウ^トイ^トはぬ^トく^トて^トがめて
ス^トお^トも今^ハ散果^トり^トす^ト也^ト此^ト紅葉^ハ色^トり^トて^ト
あ^トて^トよ^トお^トあ^トみ^トか^ト次^トも^トお^ト紅葉^トり^トて^ト
一^トひと^トお^トひ^トで^ト落葉^{枯葉^ト}な^トい^トん^トさ^トみ
考^トす^トさ^トは^トせ^トを^ト傳^トす^トで^トお^トも^トを^ト情^トし^トハ^ト
タ^ト地^トト^ト角^ト

あ^トか^トく^トら^トや^トと^トん^トお^トう^トお^トそ^トれ^トお^トう^トて^ト黒^ト落^ト葉^ト
え^ト宿^ト落葉^ト隠^トて^ト道^トも^ト尽^トに^ト落^ト葉^トお^トり^ト暗^トか^ト暗^ト
て^ト高^トさん^トや^ト海^トく^トそ^トの^トせ^トん^ト地^トも^トお^トう^ト素^トを^トあ^トお^トく

お^トま^トく^トり^トつ^トお^トそれ^トや^トと^トあ^トり^トれ^トく^トま^トる
お^ト更^トの^ト初^トも^トあ^トと^トく^トう^トア^トで^ト更^トく^トか^トて^トや
と^トん^トの^トこ^ト六^ト帖^トは^ト絶句^ト高^トく^トな^トう^トと^トう^トて^トは^トき^ト
や^トん^トと^ト云^トて^トう^トア^トと^トよ^トう^トや^ト道^トと^トえ^トふ^トハ^ト初句^ト
の^トお^トか^トて^トよ^トア^トと^トよ^トう^トや^ト道^トと^トえ^トふ^トハ^ト初句^ト
う^トん^トと^ト應^ト道^トと^トえ^トふ^トと^ト應^トを^トす^トも^トう^ト
○打^ト開^トく^トす^トし^ト人^トハ^ト路^トを^トき^トく^ト人^トを^ト厭^トい^トと^ト云^トふ^ト
非^ト也^トは^トう^ト物^トも^ト物^トを^ト高^トい^トる^ト林^トの^ト木^トな^トう^ト妨^ト一^ト
也^トく^トじ^ト人^トハ^ト始^トく^ト起^トく^トと^トう^トし^ト宿^ト更^トと^トは^ト
へ^トお^トな^トす^トも^トう^トや^トて^トや^トん^トと^ト云^トて^ト是^トと^トぬ^ト

○遠鏡トサウト見ナカラフミ分テ見舞ハウヤウハナイと面接
よやく解カハ能也富ミスルニシテ入んとソヨゴ
近キハあんタモリムンアリタタアムクテ見舞(きみふくす)と
云て何の味ひアソシテハヌキアテの緒も力ぬ^シツモ
行^シわ^シテ^シテ^シ

秋の月山タケシマやまはおけらもみぢれ、月を夕下ハシタる
月の夜タケシマやまはおけらもみぢれ、月を夕下ハシタる
夜タケシマやまはおけらもみぢれ、月を夕下ハシタる

卷之三

秋風の色 ちいろ
アキノカラ アキノカラ

二句紀氏自筆本といふすらと見れども、正しくは筆記
色のちくさて尺ゆうとよハモニ色あら物れどもよ詰
く即春部のちくさての写ハと云々霞の邊う
ちくさてアハモリ也今ハ風々千種の色尺ゆう也風ハ雲ふと
と差ひて固スアシヤ(き)物かね色ヨミゆうをどうりせたふ
まく風々千種の色尺ゆう也風色ヨミゆうとは其
わづかみを以て知トセリ千種ヨ尺ゆうと千種の色ヨ
ふと細もゆも均トホニ似テるトヨト實ハソノ紀美久のそ
くをねりえさるもれ也恐くは春霞ヨウルカクア
べしめろ」といふよにアドリ置くまされしがく

せき紙

霜のさまで落れたぬきこぼり山川錦のれまはあらる
寺の光明寺一枝せなふ山川錦のれまは乱そと何ど
綻ある方代縁をもてつうおひかき紙のれまはらきとおのの
本くうりて云表をもううてう紀也既味をうて万葉また
てもなく緯をうめにをくわくわねまうおもくおふくろ
絨をとあらも錦とくわくおもとおもむ却てうひくさなと
今と用をもれて皆まひゆく古人のよひと後人此をもれ
類ひを中くあらぬことありても織の秋ハキシトノミタカ
もれ矣一ひとへるもれ也近くハ云仕郎のらむをうちあを

きぬうあおなどお葉代錦と、さんをきく、れきるへうへ
のふくつてた已達のよもと
うじえのんの本代ひくとてきくとてよもふ

僧正遍照

といひの正紀てうじうる。此本ハ頼ひ、うなだくもううつまう
雲林院ハ即遍照住持の寺也さて御書と寺とであくを考る
うけ春部・由性法師のいき様我とおなん・盛ありかなハ人ア
要因としてうとうりとて恐らくハ法勢代止がま付
く不平代・とふとまつんを御葉よきてうれしきもううん
うちりもされ、此わがく立づ木をば直す其住おせり、雲林

院を指する言ふ事なしわまで立すらとを指すある語にて
或ち一樹或ハ一村もやといひ本のトヨ立ざれる事無くさういき
も廣らくなん雲の林立せどりやとてよされしる向調うう
も撰者も其寫意あらわをきりて雲林院より在てトヨうう
と云ふうれし心を始く寺と合せて云林院の本姓院ううく
と一もろう書いちつて當院の本葉の實京の時ううそ
をうそと顧うれまかうう春部の雲林院とあそくして
そぞも皆其端網緊要うてりゆくうなみを思ふへうう
本葉のうるをみてよしらがりといふ一時の趣うんや吟味す
(ふりの也諸注のし本院の兩をやまと云謗の言ふうる

尤甚ううとみら散々やハもみらてめぐれをううと
りみらうううもみらけ徳うれゆくをなどといひ次よけひ
をみらぬねもぞきまと云ううとくわくうすわくつと活
く被せされ、と本陰とくものとなくうれひとくの意うそ
もみらてぬともみら葉れ散々云ふ歌も僻用の差ひを辨
え

○お聞ふよひとく人の立よ木下の本代下の本葉あたのじ陰々く散
と他と云ふは歌也云はみじ陰々くをみづてうらやむとお歌で
頃じ陰なくちと云ふはあくまくに奇の陰陰すもこつひ
の化理す通ううとくわせ

○遠鏡小紅葉カキツテシマウタ
ワイと云ふは歌也れゑの散もそくそのじうきかく旅
わゆきものじ法すくみかくてお」せきをそく
「を惜む事との思(うづり)奇(か)い想もつやかとたのひ
陰(かげ)なく散(さん)るがなとつまん(まん)うとくまく味(あじ)妄(ぼう)地(ぢ)傾(かた)れ顛(たん)倒(とう)
、姑くおくれるがらる事を口、一句中にもみちぬきやわざ急
迫(せき)よき(き)ゆきめぐるや様(よう)立ちよけよとひ難(ひがい)ばよ内
へよもうちよくちよくか代(しろ)言(こと)はまなととせり、自然句調(じねん)
きさやうかれた

二條の若狭春宮のまやもふとやをう時日御屏風又龍田

月の葉なれどもをうらわけらを顎までよめら

毛氏

もみぢの風流きくとまどふとよへぐれゆる深水浪や立ちゆき
なりひの朝月

異因々委々辨べておもひ

是貞のみ此家の可念

ゆるの朝日

我ちのまことにあれどもおれの手があらへとまつて
皆あらへどやうへ、おこらへゆゑどもゆゑ

なうへ來と來ておなきのとれまをあまやまちまを

卷之三

神代の山を秋行、よきからずす
北山の葉をもとてまさりあつせうす

人をもなくて散ぬるに此のせめらはうれしにす
お家をもんとひ古本をもじとておまけに大井行幸
序よされやき秋をもとまよもんとまれてまされ
のをじよてお家のおぬしきはきの限よりおれ情まと
すく即ち又よもんよ等やて奇遇なき人もなか

秋のう

うねみ

立田姫さむじくる神のあきらかう秋のころ葉れぬとちゆく先
きのとよふに住ゆくは葉をすく

きのとよふに住ゆくは葉をすく

はゆく

秋の山をぬきたひれいもし我さへ旅こちすか
神さの山を越え龍田川をこひけふ時ときをみだれ
なれりをよめん

きよひや

うみなみの山をの松をまつて川をくぬさんじく
御神がせぬをもれては紀氏の本とよぶ神さの山を越え
てまゐる紀神の神さの山をすきゆくとあう

たひの山をまつて川かわを書かきなへ古本の神さの
山を越えまづは倍調歌と差ひく禱書とうしょと辭也神さのやを
奇きくあらわす神さの山さんとままきなす前段の立田
川かわと頃ごろ立田川たてたがわといふ書かを危保あわほ立田たてたると事で
奇きくやさの山さんへをまづうへんかとあふやく
か一歌かぎのまづうり神さの山さんを越えゆりゆく秋あきを行
すた立田川たてたがわみう紀枝きえとぬまをばゆくかくさん御歌みかげの錦にしき
ぬまぬま必ひあつうとよせ余材よざい今古ニ室立田の地理相違あい
まと赤あかと紫むらさき

○余材よざい奇きくありて此ことまを見えまつ松を西よりこれハ

物語の如きは、三室山、立田川の東へあつてゐる
と見るべし也秋ハ西へ立たまほ今向ひて越人とすも三室山
西よりよ事端かゝり立田川の東へあつてあつて
えどはつゝくに可れ山をよき行をみて來つま事とおかれ
繆ても也既にち越て來はんをさやく秋とゆゑんやこれ
ようすきりきを云ふ事更よやまづみをやヌつてんと
もう山をもうあら(され越果くだる)都もく(きよ)はあ
思ふ

○お用立田川のよみ林並山をうち如く思ひあやまつてよ
うきをさう事とせむれりえくよみきい又されよ從

のく撰者ハ織の祖を仰ぐもあらむなる（ト）と云ふ、非ず
紀氏深養父の奇仙キモチカツマキヨ（キモチカツマキヨ）
シテ吉入を延々也（トクニ立田河の事ハ異見ニ論）シカ

○遠鏡よコチモ今神ナヒ山ヲ過テキテ立田川ラ渡ルカと云
ル也深養父ハ山を越えて川をくぐれそむちまと秋ハこれ
より越人ともどもよみて深養父とはゆき遠ニ矣也コチモ今神
ナヒ山ヲスキテ來テと秋と共に越えてこれ江ノ又江へたる
事既ヨ、アヌ又云神奈川山ハ山城國乙訓郡立田川ハ其西も
圃嶋上郡也共ヨ山崎のあつり也此事別リ考證と云ふハ琳有
立田川ハ太古より大和ナリキ事琳有山城也といへばアシモ

修たう事は異見せ

寛平所時きの官守合の

藤原なよせ

白浪は秋の木葉はうへをあやめたりせあるうとくす
こは山川の嵐瀬ちとて落おる木葉のとくすくちよる漂
漂へを海より濱出一駕舟の難風ひとよ吹ふきてうきなく
さくさくひづるゑとく無くもかせ

○余材の大井川の序は秋の水うらりてなりあ木葉とあや
まれ云々土壠日記とくの私にこれを人まほ書れぬ
秋の木葉とくぬやううさむぞうこれもと向くアラトモ

云々所向を全く是は淀へ共小舟也大井の序土壠日記のハ阿海
浮く舟を木葉とくぬ也今ハ細流とくぬ木葉を漁舟の漂
流と准へくる也木葉を舟うかづかと舟を木葉うかづと
ううのまひをくつゝ人感ひく因一事やとくうやくと
ハ花をまくと人を花とくんずと今と角一事よ併され共
こは花も雪も用一高根の物とくとくのまひあひと
いとむかくハ一物と高く趣とくとくがよと舟を木葉とみ
あは遠む常とて實とくとくすとやよれあひと木葉
を舟うかづかとくとくとくとて無くと更に混とくとく
あらば

○遠鏡ニ浪ノウヘ、木葉ノチツテウイテアルノハ獵師ノ流シタ船テハナ
イカト見エルトヘテクハ非也舟を流セシハ取流トヘシトモ漂ム
トモ俗モ是セ御モ舟トヨ只參ゆく事セ流モトムヘテ
やあリ伊勢比御の長秋、沖津浪あミのミヤモミラ宮の中ト
年強く住ヘ、いざのわゆも舟ナリ、まふくらうトドケん
方なく却テモトアタリ即漂滅セフ(アマガレ)、今もアバ
蕉ひのきもさやも形容シテ初句を白浪コトモナカリ只海よ志
鷦鷯とアタシナハアリトモ川モヒツモヒツモアリト
モウリのわくありてよろづ、坂上是則

まゝこのやうでよろづ
坂上是則

もみぢもみぢなまきさりせは立田川の秋すはまれりあくまく
うえ月を
○遠鏡よ木葉ノ青イノハ色ノカハルテ秋カシレルカ水ノ青イノハ色ノ
カハラヌ物ナレハ云くとく(アハ)冰也あつ青泥毛と合合をくまくハ
あすキ内(アヒ)水よけ杖の色れり(アヒ)をわがの流々をみて水
の秋せいまづとつてき(アヒ)くれひ(アヒ)もなまきをこほる
田川を山城の山崎川也とゆひてはる大河のまことにかみゆ
うきふね葉とせらよりがい(アヒ)かねと河(アヒ)らやくふね
葉やとせらとゆき(アヒ)かねとよちゆるす

あれ山とスミトム

さきみらばけ

山河、うせあらまくあくみ、なれもあ、ぬかみらばけすり
ぬきあくぬおまえ、なれ、ぬけすり、あわまく、落葉也
とくせきうへ、うて、風のあまく、なれ、風の、うきく、ふとすり
きて、うる、根のた、わせ

○余材、なれもあ、ぬく、散うる、お葉を、みる、柵
とは、みる、くも、うれ、くわ、みく、云い、御前、小山河、お葉
をも、すれ、くは、うき、くさ、く、散うる、ゆき、流も、く
ぬうつ、お事も、くも、下水の、よ、お葉の、と、も、て、ある、底
風の、うき、る、柵と、云て、下、其柵を、流も、果ぬ、お葉也、と、も、

これ、そぞ、との、ひ速、綾、アレハ、風カフクテアマリシケウ、紅葉カチ
ツテセキカケ、く、流レテ、クルニヨツテ、云く、と、云ふ、共、小非也、こ、
の、水隈、と、此、岩根、と、それ、く、流、き、て、ス、め、を、こ、や、行、水、の、と、
く、な、あ、と、お、お、柵、と、見、か、く、それ、の、草、散、薄、く、あ、
い、そ、柵、と、似、く、だ、ん、く、皆、あ、ぬ、の、網、を、取、あ、く、な、と、魚、辛、小
つ、く、な、す、と、差、別、が、く、言、得、く、今、も、き、く、く、散、
あり、の、差、く、ち、と、の、と、又、ち、ん、と、は、く、か、柵、と、よ、く、今、ひ、け
そ、ま、と、あ、を、や、け、く、る、い、う、け、お、う、と、い、そ、ん、と、く、一、段、委
／＼、異、思、く、赤、を、

池のわ、うり、と、お、ま、れ、散、く、あ、ま、

子山集

凡あけハおほもとまち繁水清めうけとく庵アトアリ
川筋はまともあらぬあふれまされ其水清く底とみ
ま枝がる景さへあきやくよへかひとつり其ノ紀、やまと
監うるこぢらすうやう者先人古今授の序此の辞此奇
よむよて殊々力あやとづとまつり御くやまくすつゝ
○打南うちもきのあつあひれをなすよく散ぬ景さへ
お底よアリて地あはせれ多とならうとせといへ内派せひ
其後すら池の行よまち折しゆく風よ落葉を
も思ふ新さあかくよアリと云セ高ちもまち繁水清

をうながしてちもこうりあわざといふよおれす今からく
さのまなべゆき解へる頃もおまめらかふと見えぬとある
を

亭子院の仰屏風の画より
かゝ馬をひくとまつてゐるがわざり散本乃
きふ

是を馬の口を取れ（まかし人のさよのぬるはまよひ向ふ
況もあらせんはまもと徳をひくまどもされま

卷之三

うなづき打合をもよ

○遠続より稻貞鳥カ此コロ來テシテウ鳴ケルトハルハ兆也とて
鳥虫の類ひよ渡ル云ち鳴とづるよやうの跡うんはれども
なづくせ等ハ鳴とも聲ともあつてもまれハ只あまく鳴ゆるよ渡
よふまゝとさきよと稻葉氏翁がとねくつて山田ちかのうりや
もあくとたううべつてすうち彦氏翁よまさやまふくらんこ
より渡とづりとまくとわざくとよもあくまくとくまくはぢ
アミゆる人を國より渡のやうりあくらうが
題一

ゆき出ぬ山田をよそと着衣にかわせられぬ日もあ
。

諸句記氏の奉といふにぬれぬれいかうとあや漫かう奇れ
あらひめう

○遠候は百姓ト云モノハアナキナモノチヤ此ヤウチヤウスラ上六御
存知アルマイカトシテクは珠也トシテ我衣手ハ病よぬきつてなまく
うるぬ言ふニシテヤモソト其ハリス雅向くもす
其賤よりなりてよもん其禮儀をせよ知せようりこ志ひな
紀也况やよまは仰存知わらすゆどきてもつみハクシヤ只
己・身の程の儀ノミを体ノミ又次ヨ居る人ハトシモ深く
心をとめて味ひゆづきニキセト云々、萬々へお地さうけみ
粒々皆辛苦トシカニヒト外より忍よきされいれいづき

思ひやふ一トキの意と混じて、あくす

れう面アマツおかるむ門うだらう出ぬハ世をしやうすアレよくてねち
穂アシ出かんと穂。出ぬは今更、憂世をあが果ぬとしき、
て盆うんと延秋の中、さへうやう穂まですをみて云ア

○お角アシカ時アシタあくね人のとくすまと秀る事みき、それで
せの中今ハあくねとくすまと秀る事アシカと云るハ珠也これを
知く丈アシカ此世を厭果アシカれと出身の志念なども事アシカと云
てあるべからくそれと秀る事アシカを教わくせざわき
まかひとは珠也せよもだる故アシカ秀る事アシカを教わさう也

○遠鏡よ世中ヲモウアキハテタレハ今サラ穗ヲタサウヤウハナイト
思フテノ事カイと解く今更にと云祠ハ三の句乃至トアモシテム
滑トシム云クハ非也世を今更ヨ秋モシムヒト連わシムホ
向此今更をみきよりてたゞる狼のやう出ぬ者ヒト連わシム
奉向のすまよシヒモアラシトマカヒタガルヒモシムカ
雜つヒト諸被からんやもよすりせま共基紀也こは再いもとあ
穂モ刈リ稻葉ナムンモト穗ヨ出庵ヨモト穗ヨ出ぬハ秋モ
限アリテ時の方々もそれ、よりとつもをせしも
ふ人のよよとせてトツもろをり也カモ稻葉うゑの穂ヲ穗

小山。僧正遍照とす。まづ、うるやうりきよ。よあら。
日

卷之三

もみじ葉、被りて、もとで出立秋、うふやとみじ人のうち
彼紀氏の奉はば山またあらわすすむ日よりあるとまそ
僧山遍照との一句なり尙よも後よりへきより接るよ
此一句不用なまよがくうり諸跡れきをくらすまほ古本す
従ふべくこゝを和うすむちや又出てはまくへく成へく教の意
き二三の句ことよひあらわされとこば葉の梅の花神

寛平御時よりきよめにておほまこと、おはせきとれに立田

川もみらむかのまへすと河へをよみがへる

たまつせ

深山より落くふせれをみて秋のうよやまとおひびくやうゆ
こは河への音をうみてくにあとむか奉もつて今、奥山ま
残る葉いわくとくくせの秋はそく吸つて心ひまわせを

秋のうつむを龍田川と思ひやどてよる

ほりゆれ

やく毎日から來なに立田川をくや秋はとぬづくみうそ
立と立田川はむをやうて松の黒る音をよむとせ余材
音はほのとくかうく遠ぶ名すうく取出へとあく

たる歎をようけしよよやうりきれいうへは絵書をちきくせ
さうり奇の音大和なり立田川は本くお祭を廻も川せ今年も
よひてさうるんま共達はいとうもわれお祭り様あるまく
立田川の邊や秋のよよりなんといふさむく見るれまくま
うの出くよぬまくとくとく立田川の泊ゑるよき立田川の
淡、巴口秋のよよりせとくあう奇の趣せよともやう葉のなまつて
とくよる邊うばくもる深き浪や立ちんとくとく立田川
立とくよく舟のとゆつあゆるよりありひらきせる也舟の海
より入来て泊るなまくは異きよれ事まで水よよりすれいつ
きの、おまよれ何よまれ邊へ出くいふくえよとまくだつて

きなれと泊の宿はもてことひりを頬づる町寺也又す
そと云はゆうといふとは差別あひなかの川只立田川もゆくもて
人もゆくやすれなまほとい(ハ外より流せ語もすて自然舟な
とみ頬によはかさあ、よも秋のとよやなまくんとせあへる

秋りれきああらじよすゆるもの也

なり月代けむか日大井までよるか

夕月夜をくの山すなくあれを力うらや松やくさん
意のよき

○遠鏡アノ小倉山テ鹿ノナシ長イ聲ノキレスウチニと云ふ
此也には事あたずやあうらうとつあきくわざのあれ

ぬうらうとくすはなす

ねぐらいとくわせ日暮る

羽恒

道あらはきつねのやしもみらえをぬきゆきし林いまわ
くろゆき

